

『決別の塔』

著：剛しいら

iii: タカツキノボル

「おい、長風呂なのか？ だったらいいけど、まさか湯あたりして、倒れてるってことはないよな」

黒河の声が、白鷺を再び現実に呼び戻す。

それと同時に白鷺は、黒河が裸になって湯を浴び始めたことに気が付いた。

「あっ……すみません、気が付かなくて」

早々に上がるべきだったのかと、白鷺は慌てる。今日知り合ったばかりの男と、いきなり共に入浴するのは気まずかった。

「ああ、気にするな。だけどこの湯は、後でかなりくるぞ。体調が悪いと、余計にくる。白鷺は綺麗好きそうだから、最初に言うておくが、シャンプーはシャワーの湯じゃないと、泡立たない。石鹸も同じくだ。シャワーは井戸水だから、温泉じゃない」

「あ、はい……」

「飲料には向かない温泉だから、風呂で溺(おぼ)れないほうがいい。飲み込んだら厄(やっ)介(かい)だ」

「……すみません」

湯から出た途端に、本当に立ちくらみがして、白鷺は思わず黒河の体の上に倒れ込んでしまった。

「……あっ！」

「だろ。座って、少しじっとしてろ」

白鷺を座らせると、黒河はその背に回って、いきなり背中を流し始めた。

「あっ……あの」

「こういう付き合い方、したことねえんだろうな。白鷺、修学旅行の風呂で、海パン穿(は)いてたんじゃないか？」

「い、いや、そこまでは……」

他人に背中を洗われたことなんて、数えるほどしかなかった。いきなりこんなことを自然にしまえるのは、それだけ黒河の人間関係が豊かな証拠だろうか。

「ここにいるつもりになってくれたなら、仲良くやろう。俺は、他人との距離の計り方が下手だ。都会の人間は、きつともっとクールなのが普通なんだろう。だけど俺には、それが出来ない。もし、うるさいと感じたら、きちんと言ってくれ」

「……はい……」

そう思うなら、背中など流してくれなくてもいい。立ちあがって逃げ出したいほどの羞(しゅう)恥(ち)心(しん)を感じていたが、逆(の)上(ぼ)せているから立つのは辛(つら)かった。だからされるままになっている。まるで子供に返ったみたいで、白鷺の顔は自然と俯(うつむ)いていた。

「水のない国じゃ、体を洗うなんて習慣がないんだ。体は清潔にしておくように、なんて言うけどな。その前に、綺麗な飲み水すらないんだよ」

白鷺の体を丁寧に洗いながら、黒河は呟く。

「日本人が世界一の長寿国なのは、豊かな水に恵まれているからだ、俺は思うな」

「そうですね」

「日本のトイレは世界一だし」

「……ええ、まあ」

「何か、一年間一人暮らしだったから、家に人がいるのがおかしい気分だ。俺、おかしいことばかり言ってないか？」

そこで黒河は照(て)れたように言うと、白鷺の体に湯を掛け始めた。

「生(なまつ)白(しろ)い体してやがんな。筋肉も緩(ゆる)んでる。ここにいる間に、少し体鍛えるといい。そうすれば、また都会に戻った時にも体力を維(い)持(じ)出来るさ」

黒河はそこで、湯船の中に入ってしまった。

湯気がすごくて、お互いがどんな表情を浮かべているのかわかることも出来ない。湯船は広いが、黒河が入ったことで、縁(へり)からたぷたぷと湯が溢(あふ)れ出していた。「明日は、陽が昇ったらへりを飛ばす。さっきから聞いていて、もう事情は分かっているだろ」

「でも、それって警察の管(かん)轄(かつ)じゃないんですか？」

「たんなるボランティアさ。もし見つけても、救助までは出来ないから、食糧や水を投(とう)下(か)していくんだ」

湯で顔を洗いながら、黒河はどうってことのないように言った。

「ボランティアって、そういうお金はどうしてるんです？」

「心配しなくてもいい。金は……あるんだ」

また同じように黒河は言うけれど、白鷺にはその金がどこから出ているのか疑問だった。

「朝から忙しい。ちゃんと寝ておけ。眠れないなら、薬もあるが、どうする？」

「大丈夫です」

とは言ったものの、ぐっすり眠れるか自信がない。

研究員でなくなってから、ずっとあの手術のことや、青山教授の言葉を思い出してしまい、眠れないことが多かったのだ。

「研究室にいたんなら、同じ医療現場でも、あまり死と直面する経験はないだろうな」

ぽつんと言われた黒河の言葉に、白鷺は思わず湯船に沈んでいる黒河のほうを凝(ぎょう)視(し)してしまった。

「黒河先生は、たくさんありそうですね」

「ああ、俺でも、そんな時は眠れなくなる。だけど薬は使わない。腕立てして、走って、汗かいて頭を空っぽにする。そういう何か儀式みたいなものを、用意しておいたほうがいい」

自分なりの儀式が必要になるほど、死が間近にあるということなのだろうか。そんなことを聞くと、ますます気が重くなってしまふ。

「脅かしちゃったかな。まあ、そんなこともあるって話さ」

「……はい……分かりました。それじゃ、先にあがります。体まで洗っていただいて、ありがとうございました」

「礼なんていいよ。白鷺、思ったより真面目そうだな。もっと自分勝手な、嫌なやつだと思っていた。すまない、謝っておく。大病院の権(けん)威(い)主義(てい)ってやつが苦手です。偏(へん)見(けん)があるんだ。悪かった、みんながみんな、そうじゃないのに」

「そんなことで謝らなくていいですよ」

本当は自分勝手にわがままな男なのだ。冷たい嫌な男なのではないかと、時々自分のことを思ってしまう。

なのにここに来てから、そんな自分の姿は見せずに、黒河に気に入られようとしていた。それはこれから黒河と二人、上手くやっていくための、白鷺なりの処(しよ)世(せい)術(じゅつ)なのだろうか。

青山教授に媚(こ)びへつらったように、自分より強い牡(おす)の前だと、ついいい顔を見せてしまうのかもしれない。

そこまでする必要があるだろうか。

そして黒河は、そこまでする価値のある男だろうか。

白鷺はバスルームを出ると、そこに真新しいバスタオルや歯ブラシが、整然と置かれていることに気が付いた。

もしかしたら黒河は、白鷺が来るのをとても楽しみにしていたのかもしれない。あのワイン煮や、この真新しいタオルがそれを示している。

一年間、一人でやってきて、限界も感じていただろう。それに黒河は人好きなようだから、山中での一人暮らしは、やはり寂しかったのかもしれない。

待たれていたのだ。

そして期待されている。

なのに白鷺の心の中には、まだ研究室の存在が大きくあって、簡単に消し去ることは出来そうになかった。

戻りたいと思っているなら、黒河に媚(こ)びる必要なんてないのだ。なのに白鷺は、黒河に優しくされたいと願い始めている。

ほんの数時間一緒にいただけなのに、珍しく白鷺は黒河という男を気に入ってしまったようだ。最初は無愛想で嫌なやつだと思ったのに、どういった心境の変化だろう。

青山教授に切り捨てられた白鷺を待っていてくれたことが、嬉しかったのかもしれない。

同(どう)僚(りょう)といえども気の抜けない、ライバル関係がある研究室から来たから、素直に歓迎してくれた黒河に、好感が持てたのかもしれない。

いずれにしてもこれからだ。

初日からすでに、山中の遭(そう)難(なん)という難(なん)題(だい)が待ち構えていた。

本文 p38～45 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>